

第
2
部

メンバーの声

VOIX DES MEMBRES

続・「フランス」のその先へ

佐々木圭一郎
KEIICHIRO SASAKI

日本で生まれ育ち大学に入るまで海外に行ったことのない僕にとって、フランスは、日本でも多くの人に親しみのある食や芸術を除いて、ほとんど未知の国だった。第二外国語としてフランス語を選び、ひよんなことから必修講義のネイティブの先生—フランス海外県マルチニーク島出身の陽気なおじさんだったのだが—のティーチング・アシスタントになった。それがフランス語をしっかりと勉強するきっかけだった。

日仏学生フォーラム (FFJE) 自体は、一年生の夏、マレーシアでの研修プログラムに参加した際に「フランス語を勉強していてフランスに関心があるなら」と教えてもらったのだった。日本の代表という立場から海外の人に自国のことを伝えるのが面白かったとその研修で感じたこともあって、FFJE に応募した。当時の僕は、学業でも「広報文化外交」について勉強し始めたところで、リクルート面接ではこの話をして盛り上がったことを今でも鮮明に覚えている。

さて、そんな僕ももうすぐ引退である。任期の二年間は時に長く感じることもあったが、FFJE の最大の魅力は、この二年間に、渡仏プログラムと来日プログラムの両方を経験できることだと思っている。相手のことを理解すると同時に、自分のことを理解し、伝える。「学生交流」というと後者の視点が失われがちであるが、少なくとも自分自身は、これこそが「相互理解」において重要なのではないかと考える。一年目は、フランスに赴き、現地の文化を深く味わい、二年目となった今年度の来日プログラムでは、代表として、フランス側メンバーに日本の何をどう伝えるのかを徹底的に考えさせられた。その中で、自分自身、母国である日本に対する理解も深まっていったように思う。

そして、二年間を振り返ったとき、いつもはじめに思い出すのは「人」との記憶。長時間に及ぶ議論での真剣な姿、必死の口振り。来日プログラムの終わりに、成田空港に見送りに行った時のフランス側メンバーの様子。定例会議が終わって恵比寿でご飯を食べているときに「美味しいねえ」と言いながら見せる至福の表情。本当に人に恵まれた二年間だったと思う。フランスとは逆の方向に海を越えアメリカ・ボストンに行ったときにまで、昨年のフランス側メンバーと再会し、一緒にご飯を食べた色々な話をしたのだが、そうやって関係が続いていることも純粋にとっても嬉しい。

自分自身は、今後この経験を糧にして、日本とフランスに目を向けつつ、広く世界を舞台に活躍していくことができれば嬉しい限りである。最後になるが、日仏会館のみなさま、外務省、フランス大使館、国際交流基金・三菱 UFJ 国際財団、来日プログラムにご協力くださった企業・ホストファミリーの方々、事業に入った当時から関心を持っていた「広報文化外交」について (嬉しいことに) 任期の最後の最後集大成のタイミングで講演してくださった山田先生、そしてメンバーの皆をはじめとして事業のイベントに携わってくれた多くの方々に感謝を申し上げます。

日仏学生フォーラム (FFJE) の一員として迎えられてから、二年が経つ。長かったようであっけなく過ぎてしまった二年。「フランスをもっと知りたい」という素朴な動機でスタートした FFJE での活動を通じて得たものは、あまりにも大きかった。

私は海外に通算九年間滞在した。異国の地でカルチャーショックに悩まされる日本人の子どもたちの話はよく聞くが、私の場合、真逆だった。現地に溶け込むのにあまりにも熱心だったため、何の抵抗もなく外国の文化に染まっていくような子だった。外国の文化に慣れ親しむと、日本特有の思考やしきたりのおかしさに気づき始める。長年の海外生活を経て、日本に帰国した際に、「日本のよいところは何だと思うか?」と質問されても何も答えることができなくなっていた。しかし FFJE を通じて、今まで自分がしてきた「異文化体験」には大事な要素が欠けていることに気づかされた。それは、他国の文化を理解し愛するためには、まず自国の文化を愛さなければいけないということである。これは、来日プログラムでお世話になり、文化交流の大先輩である協力者の方々が口を揃えておっしゃっていたことである。そして来日プログラムの構想を練る際、フランス側メンバーに知ってもらいたい日本の側面とは何か、と自問自答を繰り返すうちに、私は日本独自の魅力というものを発見することができた。

また、FFJE はただ相互交流を楽しむだけの場ではない。活動の方向性を決めるにあたって、日仏両側のメンバーの様々な意見を汲み取り、時には真っ向から対立する意思を両立させるような工夫を考え尽くすという困難なプロセスを何度も経験した。八時間の時差がある中、お互いタイトなスケジュールの合間を縫って、次から次へと生じる難事への解決策を探った。辛くて投げ出したくなったことも何度かあったが、文化が違えども、共通のビジョンを実現するための苦労と達成感を共有でき、それは今までに全く味わったことのない経験だった。

「異文化交流」や「グローバル人材」といった言葉が喧伝される中、国際人の本当の定義を知ることができた。そして言語の壁を前に諦めるのではなく、コミュニケーションを絶やさずに、異なるバックグラウンドを持つ人々と一つのプロジェクトを築き上げる体験もできた。FFJE で得た経験は、間違いなく私の強みとなるだろう。

Les Fruits

SAYAKA WATANABE
渡辺紗矢香

FFJEが私にくれたもの

KANAMI OMURA
大村夏波

来日プログラム終了から、長いことこのページに何を書くか悩んでいた。他のメンバーの原稿を読みながら、時に思い出し笑いをし、時に目を潤ませていたが、あれやこれやと考えが巡り、余計にキーボードを叩く指が進まなくなった。しかし、締め切りはもうそこまで来ているので、迷った割には月並みだが、私が日仏学生フォーラム (FFJE) で得られたものについて書こうと思う。

まずひとつは、「自信」だ。入会したての頃は大学一年生で全くの世間知らずであり、フランス語もさっぱりだった。しかし、FFJE の様々な活動の中で、フランスのことはもちろん、チームでの物事の進め方なども学ぶことができた。フランス側メンバーともっと仲良くなりたい、という思いから、フランス語にもより真剣に取り組むようになった。まだまだ嘴が黄色いのは確かであり、フランス語も精進が必要だが、それでも、他のメンバーに認めてもらえたり、企画したことがうまくいったり、フランス側メンバーに気持ちが伝わったりと、今年度の活動全体を通してわが身の成長を感じることができ、少し自分に自信をもてるようになった。

そして、もうひとつは「人との出会い」だ。日仏両側メンバーはもちろん、OBOG の皆様、平素から FFJE をご支援くださっている皆様、そして来日プログラムでお世話になった皆様と出会い、いろいろなことを教えていただいた。日本側メンバーに会議で会えることがいつも楽しみで仕方なかった。もう彼らとそれほど頻繁には会えなくなるのかと思うと、話したいことが頭の中を駆け巡り、尽きることがない。また、フランス側メンバーは皆本当に頭がよく、しかもユーモアセンスもあり、人間的な魅力があった。彼らと共に活動ができたことは本当にしあわせだった。さらに、OBOG 会はもちろん、特に今年は広報・渉外やホストファミリー担当としての役割の中で、たくさんの人生の先輩方に出会うことができた。FFJE に参加していなかったら出会うことができなかったであろう先輩達の姿を見て、将来に希望を持てた。この場をお借りして深く感謝申し上げるとともに、今後とも日仏学生フォーラムへのあたたかいご支援を賜るようお願い申し上げたい。

振り返れば嵐のようだった二年余りが終わろうとしている。FFJE の OG になるということは、日仏の架け橋としての使命をずっと背負っていくということだ。それを忘れず、FFJE でいただいたものを大切に、フランスとつながり続けたいと思う。

いまいち勉強も手につかず、ただぼんやりと流されるままに大学生活を過ごしてきた大学二年の冬。このままではダメだ、けれども何をすればよいのか皆目見当もつかない、そんな時に日仏学生フォーラム (FFJE) と出会った。

今、ふと振り返ってみて、FFJE のメンバーとして活動に参加できたことを本当に嬉しく思う。毎回の会議が新鮮だった。大学・学部・年齢全く異なるメンバーとの交流は沢山の考え方、価値観を私に見せてくれ、意見の衝突は度々あったもののその中でも気づかされる面は多々あり、これはおそらく一つの大学の中にずっと閉じこもっていたら得ることがなかったものであろう。学祭での出店や講演会の開催など、集団で物事に取り掛かるということは実に中学生以来のことであった。FFJE は私に学生ならではの青春も経験させてくれたのだ。

中でも特に印象に残ったのは今年の夏に行われた来日プログラム。去年は12期の先輩方もいて、また、渡仏プログラムだったということもあり、おんぶに抱っこといった状態で気楽に楽しんだ二週間であったが今年は一味違っていた。ほとんど全て一から主に日本側メンバーで二週間のプログラムを企画しなくてはならない。その大変さは想像を絶するものであった。私は京都訪問を企画する班に所属していた。2、3人の旅行を計画するのはわけが違う。38名。個性豊かな面々だ。果たしてまとまるのだろうか。去年を経験しているからこそ尚のこと、生半可なものではできない。中には日本に初めて来るというメンバーも何人かいた。ここで下手をおこそうものなら二度と日本に興味を持ってもらえないかもしれない。ひいては今後の日仏の友好が左右されてしまうのでは…等々、始まる前から既にプレッシャーに押しつぶされそうであった。しかし蓋を開けてみるとそんなことは杞憂であった。勿論これだけの人数、多少トラブルはあったがその都度13期・14期の日本側メンバーが協力して対処した。また、訪問の先々でフランス側メンバーにフランス語をまじえつつ身振り手振りで丁寧に説明しようとする日本側メンバーや日本語で一生懸命質問しようとするフランス側メンバーを見ていて心が温まるのを感じた。京都訪問からの帰り道に両方のメンバーから京都訪問が出来るととても楽しかったという言葉をももらった時は、やり遂げることが出来て本当に良かったなと思った。

FFJE での活動は全て私の糧であり大切な思い出だ。14期メンバー、そしてこれから FFJE に参加するまだ見ぬメンバー達にも私たちが感じたような沢山の「うれしい・たのしい」を感じてもらいたい。最後になりましたが、二年間の活動を支えてくださいました日仏会館の先生方に深く感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

二年分の感謝を込めて

TAIMU BABA
馬場時

国籍こそ違えども
大村美緒
MIO OMURA

「日本人っぽくないよね」
フランス側メンバーに言われたことばだ。どうやら私は考えていることがすぐ表情に表れるらしく、それが日本人らしくないのだそうだ。十年前、フランスの現地校に通っていた頃にはまったく考えられなかったことばだ。当時、現地校に通う日本人は珍しかったため、何をするとせよ、何を話すにせよ、「日本人らしい」と言われ、国境を大きな壁のように感じていた。

十年前に発ったフランスともう一度接点を持ちたいと思い、2013年1月に日仏学生フォーラム (FFJE) に加わった。FFJE の設立目的は「日仏の架け橋となる人材育成」であり、メンバーは日仏の架け橋となることが求められている。フランスの学生と関わりを持つ者として、この二年間、より多くの人にフランスへの理解を深めてもらえるよう、講演会の企画や SNS での発信、学生向けイベントを開催してきた。また、日本を代表する者として、二度の交流プログラムに参加し、フランスを代表するフランス側メンバーとディスカッションを重ねた。だが、学生が一国を代表することは荷重に感じられ、この二年間は果たして自分に務まるのだろうかという不安との闘いだったと思う。実際、初めてフランス人/日本人と接点を持つというメンバーも多い。日本人の自分がとる行動、話すことばは、フランス側メンバーにとって日本人がとる行動、話すことばとして捉えられる。それゆえフランス側メンバーと時間を過ごす二週間は任期の中で最も責任を感じる期間だ。

しかし、この二週間は最も発見の多い期間でもある、十年間遠のいていた国は、その間、メディアやインターネットを通してでしか関わることができていなかった。そのため、「フランスは…」「フランス人は…」と、私の考えはステレオタイプでがんじがらめになっていたと思う。20名のフランス側メンバー一人一人と時間を過ごし、会話を重ねていくうちに、国境では区切ることのできない人々の多様性を感じた。「日本人っぽくないよね」という驚きのことばは、私たちがステレオタイプから抜け出した表れなのかもしれない。日本・フランスを代表する学生として出会った私たちだが、国というフィルターを取り除き、国籍こそ違えども同じ学生としての関係を築いた。同じ時間と場所を隣で共有し、何度も会話を重ねたからこそ、築くことのできたつながりである。

フランス人ではなく、友達に会いにフランスに行きたい。私にとって大切な二つの国がこれからも国際社会で共に歩んでほしい。そう願う人が増え、願いが強くなっていくことこそが FFJE の最大の成果なのではないかと思う。

HIROKI FUJITANI
藤谷悠
Voyages

最近、東浩紀の『弱いつながら』という本を読んだので、まずその話をしてみる。東は本作の中で、情報化された社会における「旅」の意義について述べている。旅をして異質なものを実際に見たり触れたりするという体験が、日常の中で見たいものだけを見ようとしている自分の世界に「ノイズ」を呼び込み、膨大な情報の中に埋もれる未知なるものへの扉を開け放つための鍵となる「新たな言葉」を導くのだという。

昨年度の報告書のこのページで、私は「Vive la diversité!」(多様性万歳!)と題し、多様な個性を持つメンバー達との交流の中で自分が変わっていく事の喜びを綴った。日仏学生フォーラム (FFJE) のメンバーは、まさに私にとって(愛すべき)ノイズであり、自分の世界観の形成に少なからぬ影響を受けていると感じ入る。今日の前に見えている世界は二年前とは大きく異なっているし、昨年と比べてもまた違って見える。14期として新たに会ったメンバーも、私の人生の中に一人一人が息づく存在となっているということであろう。私が常に大事にしているのは、この「一人一人」という感覚である。異文化交流というものを考える時には、とかく国家間の視点で見えてしまいがちであるが、私は国籍や民族性で切り分ける事に本質的意味は見出せない。日本側であろうがフランス側であろうが、それぞれのメンバーが個々に違った人生を歩み、その中でそれぞれに異なる背景を背負って生きているという事実に愛着を持つ。FFJE には強烈な「個」が集う。そして、誰もが譲れぬものを持っているのである。そうした「個」を持つ者同士が全てを分かり合う事など出来はしないが、それでも共に生きていく事は出来る。いや、むしろそうした相手だからこそ、共に生きていこうと思えるのではないだろうか。自分に無いものを持つ者としての他者の存在こそが、自分という存在の具体性を抽象的な世界から切り分けて証明してくれるのだから。

振り返れば FFJE のメンバーとの交流はどれも楽しいものであった、とだけ書いてしまうと、どうも味気ないし、そもそも嘘に思える。喜怒哀楽の全てが入り交じった体験が蘇るとというのが本音である。多様性のある集団が単に仲良しこよしであるはずがない。もしそうならば、それは偽物の多様性であろう。どれもこれもが不自然に均質化されていない生々しい体験だからこそ、荒削りでも人間味のあるかけがえのない記憶情報として体の隅々まで染み付いているし、生涯に渡って忘れ得ぬ日々として思い返す事が出来るという確信を持てる。

今の私は、冒頭で触れた東の著作でも取り上げられている表象文化論における「表象不可能性」の命題、すなわち「言葉に出来ないものを言葉にする」ということに思いを馳せている。この二年で多くの人と出会い、彼らとの交流の中で様々な言葉に触れたが、それでも今の私にはまだ見えていない世界がある。それを見たい。FFJE の活動の中で見えていなかったものが見える喜びを知ったからこそその衝動だろう。私の任期としての FFJE での旅は直に終わりを迎えるが、私自身の旅はまだまだ先が長いし、メンバー達それぞれの旅も続いていく。彼らとまたいつかどこかで邂逅する日を思い浮かべるために、今はひとまず目を閉じる。

日常と非日常の往来

前田 滝作
RYUSAKU MAEDA

日仏学生フォーラム (FFJE) に入るまでの私の日常は、大学に通い、専門の勉強に没頭し、バイトでお金を稼ぐルーティンワークをこなすだけの毎日だった。そんな時に中学時代の同級生から「フランス人学生と交流が出来る団体に入ってみない？」との誘いがあった。私は幼い頃の四年間フランスに滞在しており、この誘いはその経験が活かせるチャンスであると同時に、味気ない日常から外に出て、有意義な非日常・居場所が出来るまたとない機会だと思った。そこから私の FFJE での二年間が始まった。

思い返せばはじめは大学の専攻、年齢、考え方の違いに違和感があり、日本側メンバーだけでも個性や持っているモノは様々かつ強烈で、意見をまとめて活動していくのに苦労するのではないかと不安だった。しかし、二年間の行事を通し意見を交わすことで FFJE が居場所となり、はじめに抱いていた違和感や不安はむしろ私にとっての刺激となった。

二年間という活動の中でフランス側メンバーと交流が出来るのは渡仏と来日プログラムのそれぞれ二週間という短い期間であるが、彼らとの交流を通じて、日本では当たり前とされる考えや日常が国の壁を超えると非日常だという事に気づかされた。中でもフランス側メンバーの「コンビニおにぎりの包装技術はクールジャパンだ！」という発言が印象的だった。ご飯と海苔があらかじめ分けられ、ハサミも使わず、手のみで簡単に包装が解け、解くとご飯と海苔が一緒になる。よくよく考えてみると、複雑化され、日本でしか発展していないガラパゴス化された技術を、私達は日常的に何気なく使っている。それが彼にとっては非日常で、クールで、ハイセンスで、エキセントリックな技術だった。

幼少期は、両国の相違点や共通点を偶然の体験によって認知することはあっても、深く考えることはなかった。しかし、プログラムの二週間を通じてフランス側メンバーとディスカッションした事で、目的を決めて具体的にフランスと日本の相違点や共通点を認識し、幼少期とは異なる学生としての立場で考えを深めることが出来た。おにぎりの包装は日本の日常に直面したフランス側メンバーと、技術的な視点を持って会話をしたからこそ発見できた産物であり、何気ない日常に切り込んで相違点や共通点を吟味することが出来たのも FFJE のメンバーであったからこそかもしれない。

FFJE の活動を通して、日常と非日常を往来したことで何気ない所から貴重な発見をし、自分の考え方にとっては大きな刺激となった。この経験をこれから社会人となる私の礎としていきたいと思う。

かけがえのない時間

三木 理加
RIKA MIKI

偶然日仏会館を通りかかったことをきっかけに参加した日仏学生フォーラム (FFJE)。12 期メンバーにサポートしてもらいながらの活動一つ一つを楽しく新鮮に感じた一年目。13 期メンバーが主体となって活動を進め 14 期メンバーと共に歩んだ二年目。各メンバーの個性とそれぞれが持つ良さを知り、団体全体の結束も日々深まっていった二年間だった。どの経験もそれぞれに良い経験となったが、私にとっては二年目のほうが人間的には成長できたのかもしれない。

二年間を通して、団体での活動に必要なのは、個々の思いやりだとつくづく感じた。元々単独行動の多い私は団体で活動した経験が今までほとんどなく、ある意味個人主義的な考え方を持っていたとも言える。そんな私が FFJE でメンバーとして活動してこられたのは、全て他のメンバーの支えがあったからだ。皆が多様な個性を持っているからこそ一つ一つが合わさって大きな力となるし、お互いが補完しあうことで決して一人では成し得ないことが達成できるのだと思う。チームワークの良さを実感し、チームの一員になれたことを今ではとても誇りに感じる。

今年は来日プログラムの年であったので、私たちはそれに向けた準備を早くに開始した。フランス側メンバーにとって有益な時間となるよう日本側メンバー一人一人が主体となって計画をしていった。前年度は一年目かつ渡仏であったため心持ちもうきうきとしたものだったが、今年度は責任感と上手くいかどうかの不安が大きかった。仕事量としても気持ちとしても大変なことはあったが、これらの経験の中で当たり前だけれど感謝することの大切さを学んだ。相手がどれだけの時間や気持ちを自分たちのために割いてくれたかを想像するだけで感謝の気持ちでいっぱいになる。

来日プログラムは内容が充実していることもあり、皆にとってハードなスケジュールだったと思う。そんな時、ちょっとした一言を交わすことで張りつめていた気持ちも大分楽になる部分があった。フランス側メンバーも日本側メンバーも文化やバックグラウンドは違っても共通したところはたくさんある。お互いの文化を尊重しながら共感し合える関係になることは、他国との交流の中で大切なことだ。二週間で共に過ごし様々な気持ちを共有出来たことは貴重な経験だった。フランス側、日本側という括りではなく、FFJE のメンバーという括りで関ることの出来た全てのメンバーに感謝したい。

更なる高みへ

平林くるみ
KURUMI HIRABAYASHI

フランスと繋がりたい、フランスをもっと知りたい。そして人間として成長したい。そんな思いで入った日仏学生フォーラム (FFJE) だったが、任期一年目を終えた今、想像をはるかに超える素晴らしい出会いと多くの学びを得ることができたと感じている。

一年前、緊張しながら出席した初めての定例会議で、とてもかっこ良く、洗練され、活発な議論を展開する 13 期メンバーに衝撃を受けた。FFJE に参加して以来、必死に 13 期メンバーの背中を追いかけてきた一年間であった。常に団体として新たなことに挑戦しようとする彼らの姿勢と、それをやってのける能力に感心するばかりだった。そんな 13 期メンバーが主体となって作り上げた来日プログラムは、今思い返しても胸が熱くなるほど素晴らしく、今まで経験したことのない意義深い二週間だった。

来日プログラムで初めて顔を合わせたフランス側メンバー。国籍はもちろん、育った環境や専門分野を異にする彼らと、幅広いトピックについて語り合ったことはとても印象に残っている。プログラム中、普通の会話で、ディスカッションの場で、自分の意見を臆することなく口にす彼らを前にして、伝えたいことを咄嗟に言葉にできない自分に絶望し、歯痒い思いも経験した。常に辞書やノートを持ち歩き、知らない単語を書きこんでゆく勉強熱心な彼らを見て、自身の学び方について考え直したりもした。大いに学び、感じ、かけがえのない出会いに感謝した二週間だった。

15 期メンバーを迎えた今、自分達が主体となって行う渡仏プログラム、来日プログラムの準備を進めている。そんな中で、フランス側メンバーとは、プログラム終了後も Skype や Facebook を通じての近況報告、次回のプログラムについて情報共有を続けており、フランス語を学ぶ意欲や元気をもらっている。日本とフランスという地理上、頻繁に会うことは難しいが、常に彼らと繋がっていること、それぞれのフィールドで日々頑張っていることが感じられて嬉しくなる。次回再会する時までは、フランス側メンバーと対等に議論できる語学力を身につけられるよう精進したい。

そして、この一年間、優秀でいつも思いやり溢れる 14 期メンバーに何度も救われた。こんな素晴らしい仲間揉まれ、必死の思いで過ごしたこの一年間は、間違いなく自身の財産になっていることと思う。大きすぎる重圧に押しつぶされそうな不安や焦りも、それを成し遂げた時の喜びや達成感も、FFJE に入っていなければ決して味わうことはなかったであろう。自ら欲しささえすれば、出会い学べる環境がここにはある。そんな恵まれた環境に感謝しつつ、先輩方が繋いできてくださった FFJE が魅力ある団体であり続けられるように、14・15 期メンバー一丸となって奔走していきたい。

日仏メンバーから刺激を受けて

MANA MEHRENBARGER
メランベルジェ愛

日仏学生フォーラム (FFJE) での一年間を振り返って、まず、私たちの活動の要であった来日プログラムの感想を述べようと思う。

来日プログラムは、日仏のメンバー同士が直接交流できる数少ない機会の一つであるが、私はこのプログラム中、できるだけフランス語を使うよう心がけた。フランス語を専門に学んでいる身として、この絶好の機会をどうしても活かしたかったのである。彼らと話すことは私にとって、よい勉強になった。さまざまな表現も学べたし、知らなかった言葉もたくさん教えてもらった。また、単なるおしゃべりだけでなく、テーマを決めたディスカッションをしたことで、フランスの時事問題や社会情勢などを、現地で生活する若者の視点から知ることができたと、日本の社会についても、客観的に眺めることができたと思う。

彼らと積極的に会話をし、相手の言っていることが理解できたとき、自分のフランス語の勉強の成果を実感できた。しかし同時に、もっともっとフランス語を勉強しないと、という気持ちも強くなった。相手の言うことがある程度理解できても、自分の言いたいことは正しく伝えられない。日仏両言語を使いこなし、通訳をかってでてくれたメンバーたちの姿も勉強の意欲をかき立てる刺激となった。次に渡仏したとき、メンバーやフランスのことをより深く理解し、自分のことももっときちんと伝えられるように、今後もフランス語の勉強を頑張り続けようと思う。

来日プログラム以外の普段の活動でも、私は常に他のメンバーからいい刺激を受けている。FFJE のメンバーは皆、当然フランスへの興味・関心が強い。フランスで起きている時事的な事柄について自然に話したり、SNS 上でもよく発信している。そして、普段楽しく活動しながらも、真面目な議論の時にはさっと切り替えて意見を述べ合うことができる人たちだ。来日プログラムではディスカッションの班を越えてたくさん話し合ったが、生い立ちや専門の違うメンバーの意見や体験を聞くこと自体が、私の知識や見識を広げる糧になっていると感じる。大学とは異なる場所で、こういう仲間たちと一緒に活動できたことが素直に嬉しい。

これからまた、副代表としてメンバー全員と関わり、実際に会話を重ねたり、具体的な活動をしなが、自分自身もっともっと成長していければと思っている。

風の通る道

徳永翔
KAKERU TOKUNAGA

儂くも散り積もった路傍の枯葉が、身体の芯にまで沁み渡る冷たい風に煽られて舞い上がる。どんよりとした冬空に彩を与えるかのごとく太陽の光を反射して煌めく様子を僕は立ち止まって眺めていた。それは、その後訪れる新たな出会いに怯える僕に一種の安堵をもたらした。どれくらいそこに留まっていたのかはわからないが、肌を刺すような寒さに耐えきれず再び歩き出した。初めての会議へ向かう道中でのことである。

日仏会館に到着して、5階にたどり着くまでのエレベーターの中、緊張と寒さで震えが止まらなかった。まるでいつまでもたどり着くことのないエレベーターに一人取り残されたように感じた。そんな僕の心を温めてくれたのは、13期メンバーの優しさと初めて会う14期メンバーの笑顔だった。気がつくとき震えは止まっていた。

この一年間を振り返ってみると、いつも13期・14期メンバーの優しさや笑顔に救われてきたように思う。14期で唯一の男、唯一の理系ということもありうまく周囲に溶け込めない僕を常に気遣い、手を差し伸べてくれた。会議やディスカッションでは、集団の中で発言することが苦手な僕に意見を促し、同じ土俵へと導いてくれた。来日プログラム中には、英語やフランス語を満足に話せない僕を心配し、橋渡ししてくれた。日仏学生フォーラム (FFJE) のメンバーは僕の生活になくはない存在となった。

フランスの文化や言葉について話し合いたい、フランスに対する気持ちを共有したい、との思いで入ったFFJEから得たものは殊の外大きかった。それまで理系の学生ばかりが集まる環境で勉強してきた僕にとって、FFJEには未知の世界が広がっていた。毎回の定例会議で繰り広げられる活発な議論、皆が自主的に意欲的に行う勉強会、自分の専門分野とは大きく異なる分野について学んだ講演会、計画から実行まですべてを自分たちで行う来日プログラム、もしもFFJEに入っていなかったら一生出会うことのなかった世界がそこにはあった。

定例会議を終え日仏会館のドアを通り抜けると、外では既に夜の帳が下りている。街灯や自動車のライトに彩られた世界が僕たちを待っている。この世界に足を踏み入れる度に、あと何回定例会議に出ることができるのだろうか、メンバーの皆と会って話すことができるのだろうかと考えて悲しくなる。それほどまでに僕はこの団体に魅了されてしまっている。恵比寿駅まで皆と歩くいつもの帰り道、振り返るとそこには日仏会館がある。さっきまでいた会議室を見上げる僕の横をひんやりとした風が通り抜けた。

期待、出会い、そして成長

新井裕美子
YUMIKO ARAI

リクルート説明会のため初めて日仏会館へ向かった日。「こんな素敵な場所で、大好きなフランスに関わる活動ができれば最高だな」とワクワクしていたことを思い出す。あれからもう一年経ってしまったことが信じられない。高校時代フランス語を3年間学んだが、大学ではアジアの国際関係に関心を持ち取り組んでいる。その分、フランス語やフランス文化に触れる機会が減ってしまい物足りなさを感じていた。そんな時日仏学生フォーラム (FFJE) のリクルート情報を見つけ、そして運良く採用していただいた。

FFJEの活動を通し、素晴らしい仲間に出会えたことに本当に感謝している。まず、13期メンバー。初回会議の時、テキパキと議題をこなす13期を見て「すごい集団だな」と緊張したのを覚えている。一緒に活動する中で、一人一人が本当に魅力的な先輩であることを実感するようになった。14期の同期との活動で印象に残っているのは、5月のディスカッション合宿夜の役職決めと、10月の15期メンバーのリクルート活動だ。一見おとなしそうに見えて個々人がしっかりした意見を持っている14期。だから重要な事柄を決める際は、お互いぎりぎりまで譲らない。それを実感した2つのイベントであった。

フランス側メンバーとはもっと仲良くなりたい。今夏の来日プログラム中は、彼らの優しさとスマートさに随分と助けられた。はりきって日本側メンバーは準備したものの、ちょっぴり詰め込みすぎて慌ただしかった来日プログラム。それでもフランス側メンバーは、行く先々で興味を示し続けてくれた。また、ディスカッションを共に行った外交班のメンバーは意見をいつも丁寧に聞いてくれ、シンポジウム準備にも積極的に関わってくれた。ところで、電車の中でも食事中でも常に議論しているだけあって、フランス側メンバーの論理力・説得力には勝てなかった。来年度のディスカッションではもっと対等な立場で意見交換ができるよう、語学力・知識面双方で努力したい。

高校に入りたての頃、フランス語を第二外国語として選択した時は「パリ」「エッフェル塔」「マカロン」といったフランスのきらきらしたイメージに惹かれた面が大きかった。今では、文化的多様性・女性の生き方・社会におけるムスリムの存在など、フランスを参照して学びたいテーマが具体化しつつある。

「恵比寿。あなたは、大人の街になれ。」今ではすっかりなじみ深くなったキャッチコピーを横目で眺めつつ、動く歩道を通り日仏会館へ向かう。私も今年20歳を迎えた。「大人の街」恵比寿を拠点に、残り一年の活動をより充実したものとしていきたい。

ありがとう

有田早希
SAKI ARITA

恵比寿ガーデンプレイスのイルミネーションがきらめく季節になった。年の瀬になると毎年思う事だが、時間が過ぎるのはあっという間だ。日仏学生フォーラム (FFJE) にリクルートされてから早一年。それでも、共に過ごした時間の密度のためだろうか。13期・14期メンバーとは随分昔から知り合っているかのように感じる。

FFJE との出会いには不思議な巡り合わせだった。

私には6歳と12歳の通算二年余りのフランスでの滞在経験がある。帰国後、海外経験を自慢していると勘違いされたり、帰国子女だからフランス語ができて当たり前と思われたりするの嫌で、自分の中のフランスへの思いや経験を素直に言えない時期があった。けれども日本での生活が当たり前になると共に、自分のアイデンティティにつながる大切なものを見失っているような違和感が日増しに強くなっていた。将来フランスと関わる仕事に就きたいという漠然とした思いを抱いて、語学やフランス社会についての勉強を続け、フランスの友人と連絡を取り続けながらも、焦りを内に秘めていた。そんな折だった。大学でフランス語の授業を受けた日の放課後、偶然 FFJE14期メンバー募集のビラが目に入った。単発のイベントではなく、通年で準備する二週間の充実したプログラム、講演会等を企画する基盤のしっかりした活動内容に魅了された。ここでならフランスとのつながりを持続させられ、私の強みを伸ばし活かせるのではないかと、そんな期待が生まれた。

活動が始まると、優しさと行動力に溢れたメンバーに囲まれた。フランスが好きという気持ちや、多様な専門と関心を持った学生をつなぎ、刺激的な話し合いの場を生んでいる。来日プログラムでは、準備段階から団体会活動する難しさや自分の至らなさに気づく場面も多く、本当に多くのことを学んだ。苦勞を忘れるようなフランス側メンバーの笑顔や言葉は忘れがたい思い出だ。気づけば、心の底に潜んでいた違和感は消え、日仏両国の交流に貢献したいという謙虚な思いが芽生えている。

目標であり頼りにしていた13期メンバーがいなくなり寂しさと不安が残る中、これからプログラム担当、報告書担当として重責を負うことになるが、確かな希望が背中を押している。FFJEの築いてきた信頼や交流の輪が支えてくれている。何も言わなくても仕事を手伝い心配し労ってくれるメンバーがいる。会議外でどれだけの時間を費やせばいいのだろうかと思ってしまう仕事でも、義務感からではなく進んでやろうと思える環境がある。気づけばFFJEのことを考えている自分がある。

来年の今頃は、どんな気持ちで日仏会館から帰路につくのだろう。

恵比寿の街が眩しくにじんで見えているかもしれない。

FFJEの活動を通して学んだこと

KANAE KIHARA
木原香菜恵

幼少期、ドイツに住んでいた頃から気になっていたおとなりの国、フランス。うちから車で二時間もあれば着いてしまう場所なのに、「言葉から国民性から何から何までドイツと全然違う!」と、初めてフランスを訪ねたとき衝撃を受けたのを今でもはっきりと覚えている。おいしい食べ物、おしゃれな人々、かわいい雑貨にきれいな建物。私はフランスに魅了された。日本の高校に編入してすぐにフランス語を学び始め、大学の先輩を通じて知った日仏学生フォーラム (FFJE) にも迷うまでもなく入ることを決めた。

FFJEで行う活動は、基本的に学生が主体となって運営する。来日プログラムでは訪問先の選定から企画まで、全てが学生メンバーの仕事だ。そのため、準備期間もプログラム中も大変なことがたくさんあった。私が所属する京都訪問班は二泊三日の京都訪問を企画したのだが、お盆かつ大人数なこともあり、宿や食事するところを決めるのに手間取った。ディスカッションも、日本側メンバーが思ったことを伝えることに苦労した。しかし京都訪問が無事終わり、「京都、楽しかったよ!」と言ってもらえたときや、皆で頑張ったディスカッションを最後に大勢の前で発表したとき、最後に「絶対また会おうね!」と約束したとき、本当に「やってよかった!」と思えた。FFJEの活動を通して、一生付き合えるであろう仲間がたくさんできた。

FFJEで活動していたなかで、思い返して後悔しているのは、たくさん言い訳をしてしまったこと。授業で忙しいから。その他の活動もやっているから。家や大学が日仏会館から遠いから。そうやって自分や周りに言い訳して、思うように活動に参加できなかったり。あまりコミットできていないのに、皆が会議のたびに温かく迎え入れてくれるのが後ろめたいときもあった。きっとたくさんの人たちに迷惑をかけてしまったと思う。「責任感を持って行動する」ということの大切さがFFJEの最初の一年での一番の反省点であり、一番学んだことである気がする。今後に生かすとともに、今まで散々迷惑をかけた、そしてたくさん支えてくれたメンバーたちに感謝したい。ありがとう。ごめんなさい。

決して楽しいことばかりではなかった。就職活動の時期が変わったりと、今年ならではの問題もあった。うまくいかなかったことや思い通りにいかなかったことがたくさんある。その悔しさを、次のプログラムにつなげていきたい。

近藤桃子
MOMOKO KONDO

ここから始まる

日仏学生フォーラム (FFJE) を知ったのは、大学二年生の秋である。きっかけはフランス語の授業で配布されたリクルートチラシだった。そのときは深く考えなかったが、以来何となくチラシのことが気になり、毎日鞆に入れて持ち歩いた。思えば、その頃から私の心は気づかぬうちに、でもはっきりと FFJE に向いていた。

私たち 14 期メンバーが活動に参加して、一年が経とうとしている。飛ぶように過ぎた日々だったかと聞かれれば、そうではないと答えるだろう。あまりに中身の詰まった時間であったから、一つ一つの出来事を思い返すと、人生を振り返るのにも似た重みを感じる。

秋、初めて日仏会館に足を踏み入れたリクルート説明会。広い会議室に少しの緊張感を覚えながらも、不思議と気分は落ち着いていた。活動内容についての説明を受けたあと、帰る直前まで現役のメンバーたちと話した。今も記憶に新しい、13 期メンバーとの出会いである。冬、リクルート選考を経て、FFJE に加わることが決まった。初回の定例会議では、早速来日プログラムに関する連絡やディスカッションのテーマについて考える時間があり、メンバーの一員になったのだという強い実感とともに背筋を伸ばした。春には、プログラム準備が本格始動。訪問先の企業に連絡をとる際、「日仏学生フォーラム 14 期」という肩書が付くことが嬉しくもあり、身の引き締まる思いでもあった。そして夏、いよいよ来日プログラム。まさに駆け抜けたという印象の、言葉では表しきれない二週間。渡仏経験のない私にとって、フランス側メンバーとの出会いはいわば初めて知る生のフランスであり、彼らと交わす一言一言が特別だった。気づけば秋になり、今度は日本側 15 期メンバーの募集に奔走。様々な人のフランスに対する熱い気持ちに触れた。リクルート担当として、ここにかけた思いは大きかった。このページを執筆している現在は、二度目の冬。いつの間にか同期が何でも話せる大切な存在となっていることに幸せを感じつつ、寂しさの中、13 期メンバーを送り出そうとしている。

FFJE では、毎年半数のメンバーが入れ替わる。こんなにも重みのある活動だが、現役として関わることのできる期間はたった二年ほど。一年の経験を次の一年ですぐに形にしなければならぬということだ。正直に言えば、まだ自分たち 14 期メンバーが FFJE を導く実感はわからず、心細さが募る。だが、一年目を終える今こそ、意識的に新たなスタートを切る気概を持つことが重要だと思うのだ。少人数で活動する FFJE は、一人一人の個性が全体のカラーに直結する。だからこそ、前年と比較しそれを踏襲するより、自分たちらしさを見つけたい。「日仏の架け橋」という同じ言葉に惹かれて集まった学生たちが毎年違った魅力を発揮できることは、FFJE の良さの一つだと思うから。

これまでに得た多くの人との繋がりとは、はっきりと FFJE に向く自分の心はそのままだ。FFJE を自分たちなりに彩るべく、気持ちは新たに。14 期・15 期メンバーによる新しい一年は、ここから始まる。

KAHO SATO
佐藤佳穂

「追いかけて続ける」

学部の研修で大学一年次に初めてパリを訪れた際、まち並みの美しさや人々の活気あふれる暮らしぶりに感銘を受けた。それ以来、学部では都市文化、まちづくりについての勉強を続けている。二年次夏にはどうしても成し遂げなかった、フランスの地方都市を一人で巡る旅を実現させ、フランスを 600km 縦断した。フランス語は大学入学時に第二外国語として始めたので不安だらけであったが、私のフランスに対する興味と好奇心はその不安に勝る強いものだった。しかしその旅を終え、いつものようにフランス語の勉強と学部での勉強をこなしている日々に戻ると、何か物足りなさを感じた。そんなとき、出会ったのが日仏学生フォーラム (FFJE) だった。ここでは、自分の日仏に関する興味を話すことができる。様々な大学、専攻のメンバーから新しい考え方をもらうこともできる。さらには、フランスの学生ともそれができる。それまで一人で、あるいは大学内で物事が完結していた私にとって、この上なく大きなことであった。初回会議のときの充実感で溢れる気持ちは今も大事にしている。もちろん、他のメンバーから刺激を受け、自分の考えの甘さや未熟さを痛感することもある。むしろ、反省だらけだ。しかし、それが原動力となり現在もこうして学びを深められている。

来日プログラムで、初めてフランス側メンバーと対面したときの感動は今でも忘れられない。フランス側メンバーの日本への関心が想像以上で嬉しく思った。しかし、苦労も絶えなかった。ディスカッションでは語学面でも方向性の相違でも苦戦した。企画・運営の上では「文化の異なる 38 人で共に行動する」という重みを感じた。だからこそ、「今は良いアイデアだよ!」、「カホがこの場所を選んでくれたの?」なども良かった。ありがとう! などとフランス側メンバーから声をかけられたときは心から嬉しかった。

大学入学までフランスとの縁もゆかりもなく、まして日本から出たことのない私が、自分の興味を追いかけて偶然たどり着いたのが FFJE だった。こうして活動していただけるのは、間違いなくメンバーのおかげである。普段、改まって言えないけれども、ありがとう。これからも自分の信じたものを追いかけて色んなことに出会いたい。